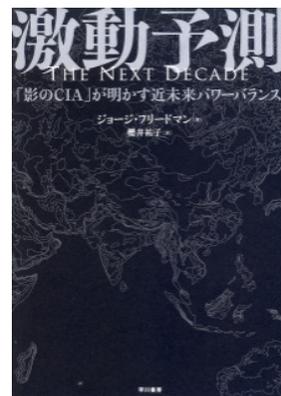


## SPACE JAPAN BOOK REVIEW

衛星通信関係者が見た

Reviewer: 編集顧問 植田剛夫



ジョージ・フリードマン著、櫻井祐子訳：“激動予測・影のCIAが明かす近未来パワーバランス”、早川書房、2011

(原本) George Friedman: “THE NEXT DECADE・Where We’ve been...and Where We’re Going”, Doubleday, 2011

本書は、アメリカで「影のCIA」と呼ばれる、インテリジェンス企業ストラトフォーのフリードマンCEOの著作で、2011年4・5月号のこの欄で紹介された「100年予測」（参考文献[1][2]参照）のいわば続編である。「100年予測」が今後1世紀にわたっての、アメリカを中心とした世界情勢の予測だったのに対し、本書は今後10年という身近な期間を考察する。身近な期間だけに、単なる予測にとどまらず、アメリカの政策に対する著者の熱の入った議論が述べられ、まるでアメリカ大統領のために書いた指南書のようにも読めるのが面白い。

予測は当然のことながら、意図せずに「世界帝国」になってしまったアメリカから始まる。

「100年予測」では、いま世界の海洋を支配するアメリカが、21世紀の世界を強力に支配するとされたが、本書では「帝国」の力と地位を持ちながら、「帝国」になってしまった自覚を持ってアメリカの現状を懸念する。帝国でありながら、建国以来の道徳的な共和制を保てるのは、大統領の「狡猾さ」と「英知」によるしかなく、「大統領に求められるのは、何が起きるかを予測し、予測不能性を最小限にとどめ、そのうえで鋭くすばやい洞察をもって、予期しないものに対処することだ」と当然のように要求する。的確な要求ではないか。国の首相や政治家に、こんな要求を出せない我々国民のレベルが、あのような国政指導者を生むのだろうか、忸怩たる思いすら湧いてくるというものだ。

アメリカの取るべき道は、その地域で敵対し合う勢力を利用して互いを打消し合わせ、勢力均衡の維持によって「帝国」の幅広い利益を守ることに、過去10年のアメリカは、対テロ戦争に執着しすぎ、この勢力均衡政策を見失ったので、今後10年は大いにこの收拾に苦しむだろうと著者は見る。これは主として対イラン政策と、復活を許してしまったロシアについて述べられている。我々に重要なのは、この見方を東アジアに適用すれば、アメリカは帝国維持のために、日本と中国をバランスよく牽制し合わせたいわけであり、アメリカが日中の有事には日本を守ってくれるという単純な期待が、いかに幻想そのものであるか、よくわかるとも言えることだ。この幻想は、孫崎亨氏による参考文献[3]、[4]に明快に説かれているもので、興味のある方にはご一読をお奨めしたい。現に日・中との関係については、日本からアメリカへの依存をできるだけ引き延ばすこと、日本を追いつめぬこと、中国が分裂・弱体化して日本が強くならぬよう中国を助けること、そして「ほんの僅かでも日本を抑止できるものは、何であれアメリカにとって価値がある」と、アメリカ盲従の外務官僚などが目をむくような表現がされている。「100年予測」に述べられたように、今後長期スパンでアメリカに相対する東アジアの強国は、あくまでも中国ではなく日本であり、2050年頃の日米再戦争勃発の前段階としての考察が本書でも読み取れる。これを読んで俄かにアメリカに対し（民主党の先代の人物リーダ達のように）安全保障上の態度を硬化させるのもどうかと思うが、少なくとも本書や前述の孫崎氏の貴重な主張は、よく頭の中に入れて咀嚼しておかねばなるまい。

本誌でこの本を取り上げたのは、「100年予測」の紹介で述べられたと同様に、本書でもまとめ

の部分で「宇宙」が目立つ形で取り上げられているためである。まず、今後のエネルギー消費の増加に対して10年以上のスパンで見ると、割安で、劇的に供給量を増やせ、軍隊を送り込んで支配する必要のない地域にあるものが望ましい、すなわち宇宙太陽光発電のような画期的な新技術を、国それも国防総省主導で進めるべきと著者は説く。さらに、「帝国」の力の礎は海洋であり、アメリカの海洋支配を脅かす軍事力を対抗勢力に持たせてはならず、海軍と宇宙部隊（Space Command）がアメリカの戦略基盤だとする。これは、次の10年には偵察衛星が対艦ミサイルを誘導するようになり、ミサイルそのものが宇宙に配備されるようになるからである。この主張によれば、最近の中国軍事宇宙の急速な増強ぶり（参考文献[5]）は、アメリカにとっては看過できないものとなりそうだ。

本書には冒頭に「日本版刊行によせて」として、著者のメッセージが寄せられている。アメリカが絶えず変化する「氷河型社会」なのに対し、日本は長い間変化が殆ど見られぬが、実は水面下で圧力が高まり、突如として体制が瓦解し大変革が起こる「地震型社会」だというのだ。大震災で自然の力が解き放たれたように、国民の精神にも大地震が必ず起きる。アメリカ側の、日本の国益軽視の危険な行動に耐えに耐えたあと、大きな地震が起きて、日本が中国よりも有力な21世紀の強大な地域大国になることを、著者は信じて疑わないという。大震災の直後に、日本人の冷静さ、逆境での紳士的な振る舞い等が世界から賞賛された。これは嬉しくはあったが、本当は国のトップの指導力、危機管理能力が褒められるようになりたいと感じた。その意味で、東アジアの最強国となる日本の潜在変革力を著者が確信してくれていることは、日本人として大きな自信回復につなげるべきものではなからうか。■

#### 参考文献

- [1] ジョージ・フリードマン, 櫻井祐子訳: “100年予測 世界最強のインテリジェンス企業が示す未来覇権地図”, 早川書房, 2009
- [2] 飯田尚志: SPACE JAPAN BOOK REVIEW “フリードマン「100年予測」”, SPACE JAPAN REVIEW No. 73, April/May 2011
- [3] 孫崎 享: “日米同盟の正体 迷走する安全保障”, 講談社現代新書, 2009年
- [4] 孫崎 享: “日本人のための戦略的思考入門—日米同盟を超えて” 祥伝社新書, 2010年
- [5] “From AEROSPACE AMERICA, コヴォールト: 中国軍事宇宙の大潮流”, SPACE JAPAN REVIEW No. 74, June/July 2011